



岷江入楚

明石

卷十三

特別
~ 12
4604
12



特
112
4604
12



明石

十六歲

三月廿七日の秋をくまらるる

雨風狂不休也

自二葉院所使來也

雷落廊燒也

又夢見故院竹也任住吉神導可避此浦之由也

三月十三日明石入道兼御舟守源氏辰也立日差也

源氏辰兼和渡明石浦也濱録有候也

書御文令海京使也

明石入道兼源氏中首物候也

四月更衣裝束也

前琴彈廣陵散也

明石入道兼前彈琵琶也入於諸吾娘能彈等之由也
入道又彈等也

入道懐心中願有到住吉津及十八年之由也

又之日老消息お累急宿下入る書返也

次日又老書也明石上書返也

小汀文庫

神門御夢奉見故院也 三月十三日

二條太政大臣薨逝下

八月十三日比奈所馬出思急宿行也 對面の上

新書を二条院下

源氏書繪行二条院后同去絵行也

元七歳

四月至上御業也

七月六日源氏帰京宣旨也

明石上懷妊也 育らる也

帰京前二日向明石上行念物音惜別也

於新波修祓也

西京着二条院行也

復平任任權大納言也 主大侍也

八月十五夜初参内也

使改之次也治息おのる也

筑紫五節着奉文お源氏也

秘 明石 卷后 河光源氏自陞廣浦移居此下之故也

秘 卷后の奇并切名より源

秘 源氏抄の三月十三日より源氏に浦了いり行り 箋同并同

秘 行名風やまら

三月一日より十三日迄風やまらりさくは是れ未と海

その中にも因成王の時因云のなれは管叔奈叔

と云ひ 諸侯因云且を終と云りりて因と東

都より居下りり二年を秋天大雷電

風吹粟也 子丸大木の根をり成

王其時金藤の書を 以書因云の制作也 以りき之

て因云の玉をり切わりて更よと云き也

已終す所を風もりり成り 成り粟意也大木

成り成りり成りり成りり成りり成り

二叔の終りり成り成り成り成り成り

成り成り成り成り成り成り成り成り

本しとののりくになれりしは源氏君を周公旦より
なれりるなり十三日その日風と云はれり

三月一日上巳の後の時此の夜多雨云々の事あり
故に宿業多しき事ありしと云

三月一日上巳の夜ヨリ十三日不止

周公旦事 尚書ヲ用へし史記ニ雷雨ノ訖云々

周公居東都二年天大雷雨以風木益偃大木斲拔

我王啓金縢書迎周公天乃及風未及起 事未詳

周公且者周武王才也 孝篤仁異於群子及武王即經當

捕翼武王用事居矣封且為魯公周公不就封留

仇武王

武王克殷二年天下未集武王有疾不豫周公於是乃

自以為質設三壇周公北面立戴璧東立壺 以礼

武王
周公旦
管叔
蔡叔

神在以為質告于太王、季文王 告ト祝ノ辞也 史策祝策

有肩子之責於天以且代王義之身於是乃即三

王而卜人皆曰吉周公喜用筮乃貝書遇吉周公入

賀武王曰王其无害周公藏其策人告滕、賈

下 藏之於匱緘之以金 不欲人聞 誠守者勿敢言明日武王

有瘳其後武王既崩元年己酉六年庚子崩

太子誦代立是為成王

成王少在強葆之中周公恐天下凶武王崩而畔周

周公乃踐阼代成王攝行政當國管叔乃其群弟

流言於國曰周公將不利於成王故言於國以誣

周公惑成王周公乃告大宰召公奭我之貽弗辟

而攝行政者恐天下畔周公以告我先王太王、季

文王、三王之憂乎天下久矣於今而后成武王

至終成王少將以成周公我取以為之若此於是

卒相成王

卒相成王

卒相成王

卒相成王

管蔡武庚等果率淮夷而及周公乃奉成王命
興師東伐遂誅管蔡殺武庚放羣牧
封弟叔鮮於晉封弟叔虞於魯

成王長能聽政於是周公乃還政於成王
臨朝
周公之代成王治南面信天子負斧
依以朝諸侯及七年後還政成王北面就臣信躬
謹致與如畏然

初成王少時病周公乃自攝其咎沈之河以祝於
神曰王少未有識奸神命者乃且也亦歲其策
於府成王病有瘳及成王用事人或譖周公
公乃奔楚成王發府見周公禱書乃泣及
周公歸

誰周云秦既燔書時人欲言金縢之事或失其本末
乃云成王少時病周公禱河欲以王死歲祝策於府成

王用事人譖周公乃奔楚成王發府見策乃迎
周公

策 私云史記：雷雨沙江無之為

尚書 第七 金縢篇云

成王有疾周公作金縢為請命之書歲之於
匱藏之以金不欲人用

既克商二年王有疾弗豫不悅豫也公乃自以為功
命為已事為三壇同壇禪除地也史乃冊祝曰惟爾

元孫某遭一厲虎疾若爾三王是有不子之責于
天以且代某之身公歸乃納冊于金縢之匱中
王翌日乃瘳成王既喪管叔及其群弟乃流言於
國曰成王死周公將政具弟管叔及羣叔霍叔乃放言於國以誣周公
公將弗利於孺子三叔以周公大聖有欲立之勢遂生流言

三叔以周公大聖有欲立之勢遂生流言

周公乃告二公曰我之弗辟我无以告我先王辟法也
斯得周既告二公遂東征以二年之中罪人此得
三監武庚也未敢誚或王信流言而疑周公故周公既誅三監而
王亦未敢誚秋大熟未獲天大雷電以風
畫偃大木斯拔邦人大恐王与大吏畫弁以啓金滕
之書乃得周公躬自以為功代武王之說無書本
二公及王乃問諸史與百執事曰信噫公命我勿
教言今言之則王執書以泣曰昔公勤勞王家推
弔冲人弗及知言也幼童不及知今天勤威以
周公之德發雷雨之威以王出郊天乃雨及風木
則畫起郊以玉幣謝天即二公命邦人凡大木

一偃畫起而築之歲則大熟
箋私一河海二周公且ノ有木不載花始有斗况
私云河海二三月一日上巳ノ後ノ時凡吹出之尚
書ノ金滕ノ篇ヲ載タリ漢ノ末也但河海
本依テ載サルモ有之凡

日ありまかりぬ

三月一日より十三日までの事

まじりてりた

義云あ後々弟也ニ説れあり

一系却のりれ初雷風はあり申い進退乃

三河をさしりらる後

又ノ弟は昔ありあ来りてりりひまきり

みさよとせこれハ公界をさす也

公つりしし

必 左近の楚の如く又や一の風風の恐怖あり
るしよのまはるる
兼云ぬのこまの第也

必 雨風火は雨まよきすといふこと
兼云源しり平らふのこまは勢岳の介り
しはも陰名の力を旧宅のあはれし叶へ
らんとせ

兼。紀伊周公自播廣國竊上滋湯母仍配太宰
府被処重科 栄也知れ

私に我後より

人しつ途ならずしをゆさめ

必 伊周公の事
必 帥内大臣 伊周公 播廣國より後又いそは都
のりて母君よりあはれすしをゆさめをえ
又よ右宰府へさしはるる事を物風よみしり

伊國公の遠流の事より思てゆきす事といふ
時節亦尺花多語女又えりかのあよ白如

浪風よさうれて

必 人きと遠く色しきみ殊事たり并

必 兼云ぬのこまの第也

必 兼云ぬのこまの第也

必 兼云ぬのこまの第也

私云兼云ぬのこまの第也
いかに都へゆりきり(寺)瑞ねたり(を)源は
兼云ぬのこまの第也

かくなりし力をまよし

兼云ぬのこまの第也

兼云ぬのこまの第也

只雲風のなれやあまの天乃のなれはしるは
も 有風をきしきすをそめみれとよふ風洞と云
又日の月十日の夕時をくへる亦やますすす
て元のさしれといふり

第二巻 雨雷電ノ変を云又花ノ第ノ川
二巻院より
此上りの山使也

あやききすいそ
必 山使甚言すまれ也 花第曰
兼言字の所り人なりやあれせし
みりうのそい

第河石のりらふ
必 日記記すらのたふか
如くまじや
りたるかきまじ
必 形も辱字や力とまじきまをなりをこみ解る

かすヶ程のおをまじき
まじき由也
義を辱ノ字や力ヲ恥ル第也
くまじ

第 窮屈 何若日
以多ふふ
第 卷の文也

あまのくまやま
必 此上りの文の句也 大ま曰
此の詞の中をこまじきまじき
まじきまじき

4のりまじきまじき右前の詞あま
必 此の字をまのらまじきまじき
第云 鬱胸 如不雲披
必 ながめやまじきまじき
必 云定家つらよ

りあるまき枝のちがうせしむら付ぬちのくて
 のをここの中敷のえりりあめ下りりたるま
 ちりりるる
 風やわらわの吹しやりのちけりりなるま
 井 園をのち也
 必 ありれりるる也
 義云相像之形如極浪況筆戸平
 いさあたるる
 必 文をりあたる
 いさあたるる
 必 ちの美をさるる一ゆるりたるも也
 うきくたるる
 源のちち也
 京ももける風
 いし使の
 ちのちちち

因佐異とよ也

仁王會

七難即滅のちちかヤノの時木こたのちち
 必 ちち也 真日

仁王會 經云海濱般若波羅密七難即滅七福即生
 必 万姓安樂 帝王歡喜 日月失度 星宿失度 火而風早 鬼賊謂
 之七難

仁王經持統天皇御宇始渡米本朝 け義 筆り
 のちちち

三月被行仁王會例

天曆六年三月廿七日癸未被行時仁王會
 必 日月失度 八宿失度 大火燒國大水漂没 大風

吹殺炎火洞然四方賊來没回
 兼加 二代一度仁王會 江次中十五條時

當日大極殿儀如御齋會 誦讀師或兼興
 辨の納言 外記史式部 彈正者東西齋謂之出
 飛

朝座行香

私
不ノ名七ヶ
外ノ
兩院
四右
三
三三

上卿已下各内如常

公卿不勝諸堂

三僧有法眼新

中殿

南殿

大極殿

豐樂殿

武德殿

朱雀門

羅城門

西院

西后

春宮

太政官

外記廳

中務省

式部省

民部省

兵部省

大藏省

宮内省

左京職

右京職

左近府

右近府

左少門

右少門

左少監

右少監

東寺

西寺

聖神寺

南殿

中院

諸院

諸宮

七僧

自金旨三僧

押諸國六座也

若京中六座可被定九可滿

於百座之故也

總取定進諸堂法用

維那者取司請用

私養河海ノ弟々ノを所ノ畧々始ニ

御前より

京の役をせしむるに終るやまゆら

と源の功なりしけり

うき世の毎

とらむしは役のすま

といふぬすま

つおのすまよりわりのつぎまわらむ

比のうきとらむるのひかりうつらり

兼大雷雨電

日本紀オサニナセ

毀諸善人故天降電

金光明經

唐德宗貞元四戊辰四月五日電落大如彈

長和二年三月雷鳴冰降大如梅

已上河内系ノ事ニ

京ハ是れをさるま

仁王經六月雨水霜電

天

天

山もろ

海の心さうまに

幸若くちん 義載

その又乃日

二葉院より山使の集りうまのすうとわうし

とい新しそのおき日也

いふも山色 義日布記

野分巻に風のわすきすなまに是やと吹うし

あつくとあは

あつかりさうしき人なり

必しちりおされん也

見れしうかり

義祖後の人々也 義ま京の山使かろつて此の記り

各トつるの信也の人の也

私義まかくのこくはうて朱とけれり京

の山使と云事月へん

欠ふの海をもんが

あまのふなをもんごと

君の心をしりた

源の志のふつりうと居り也

いのちをまはせんと

実よとせらぬまはれいそを命をさつて

のちのあしとこらつて源のちり也

ちののちり

義の青幣 白幣 又五色の幣なり

何云の神ちりさうし

義河古語拾遺云至於盤余雅櫻朝臣佳吉大神頭

日本記曰浮濯於湖上因以生神凡有九神其上筒

男命中筒男命底筒男命三神鎮坐矣是則

今佳吉明神者神功皇后立年 佳吉明神頭

四社中 兩社衣通始

國基説 或神功皇后

住吉明神守 往來之般故神宮皇后新羅ヲ平

ケ給時以般為幣トセ

私已と箋

恒古の御神ハ恒來の命をまのり給故ハ神功皇后
新羅を平了き給所ハま為幣也明石入道所命を
らきいそもちりけしあやき風かそく吹くるよ
ー下ニみかふりあきこ給しこり恒古の御神
新羅つる故ハ恒來ハ神威ハあつり給也

おかく大死

箋云恒古恒來をくき序也

笺云恒古恒來の 笺修子の人トセ

恒來の人トセ 恒來ハまのりしきの人トセ

物おかゆりしきトセ

箋云流し平性の人ニれり其才にとり性の一の
もはつる人々をふ

ていじうのふりてはまよ

箋云一恒神ハ告々小初也金藤の笺祝の如し

長根云養在深宮人未後ハ是をまのりハ自親

政要乃神一あり

源氏冠をまのりハ免ハ初一人也いさかも世乃

か一まのりハ志行ハまのり一人也 隆徳湯飛

じよんち

中々とらふじよんちつれし也

又まのり

箋云上の河よまのりしはた初ハまのりし
ふゆあはまのりしハ今もまのりし古に今も其
例ありしきまのり
ありし御うらりしとまのりし御り

天地より

何 大八洲古今序にわがゆき所なるくまのまきやしの田の
かうすくまきれいあきんめくそのけはくく山のあり
たりしききたりし申す

家をさるれさるれをとりし

入春純七日離家已二年 随隔道衛 若家

離家三四月落涙百千行万事皆如夢時、御彼

蒼龙侍云公卿非王命不越境

公卿に王命よあつれ境をあすすことり

よいくわろ下り

かくれしきめふん
もれより源氏の君の祈禱の紙也とよしつんきん

くみちり人の影をさ

まやしありのま

恒名の四神の方也

せんしんてん

源のまねしめ

わらわらるん 夢海東まき瑞也ろ可局

うららのさながら大炊の

大炊殿 新撰未記 伝云巨炊屋也

雑舎也 大炊のせん

食事志すけり也 一祿

私云大内の大炊寮も甲一弟也

元平をとりしやうり

帰来倚杖自歎息、俄頃風定雲翠色 北侍 桂扇瘴

来雲似雪 洞庭春尽水如天 柳子厚詩

やまのりら

李部王記養平元年十月七日始壞清涼殿南一回国

去年雷震改造也、东行南廊及东校之殿廊

同改造也

うららの人乃あふらりし
わらわらるんついであきろりしとせらるる

あをわしてそり

此雜會とて事をあつて行て
日本のはるるの

必雜

あつてやせはるる

かゝる事ならぬ事ありしもの行のいふも人
居ちりさあつてあつて

えをいしとて

酒ともなつていふ事なると人追つてあつて

あつて人さき

あつて風いふは

あつてあつての事也 井田

いふ事さ

酒の事也

海よりす神の事なりか所とて境のやをわいふ事な海

あつてあつての事なり境のやをわいふ事なり

四糸大納言九糸乃中によふ

毛

信長の神ははるる日向玉橋の小戸の境ありとて

あつてあつての事なり海よりす神とて境のやをわいふ事なり

あつてあつての事なり海よりす神とて境のやをわいふ事なり

あつてあつての事なり海よりす神とて境のやをわいふ事なり

あつてあつての事なり海よりす神とて境のやをわいふ事なり

あつてあつての事なり海よりす神とて境のやをわいふ事なり

あつてあつての事なり海よりす神とて境のやをわいふ事なり

あつてあつての事なり海よりす神とて境のやをわいふ事なり

あつてあつての事なり海よりす神とて境のやをわいふ事なり

あつてあつての事なり海よりす神とて境のやをわいふ事なり

あつてあつての事なり海よりす神とて境のやをわいふ事なり

あつてあつての事なり海よりす神とて境のやをわいふ事なり

あつてあつての事なり海よりす神とて境のやをわいふ事なり

あつてあつての事なり海よりす神とて境のやをわいふ事なり

あつてあつての事なり海よりす神とて境のやをわいふ事なり

あつてあつての事なり海よりす神とて境のやをわいふ事なり

あつてあつての事なり海よりす神とて境のやをわいふ事なり

あつてあつての事なり海よりす神とて境のやをわいふ事なり

あつてあつての事なり海よりす神とて境のやをわいふ事なり

必 ぢうし 籠る

必 ころきまき ねりし 一

必 きまき ねりし 一

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

必 ねりし ねりし

ハ美泉といつてこと

必 日裏ト養を(き)す

必 源氏田舎のありては

必 もよまひりせん

必 源のまを(き)す

必 月の海の(き)す

必 心下の約妙絶也 拙子養う 残月満屋梁に 疑顔也在と

必 いづよふと(き)す

必 月の海を海の巻るもわり

必 酒より流よのりてと(き)す

必 力やうの市ふる(き)す

必 心本しある(き)す

必 孝心のむす

必 孝心のむす

必 舟に近の(き)す

必 孝心のむす

必 中く(き)す

必 羨の(き)す

必 又や(き)す

必 福(き)す

必 又二三人(き)す

必 又二三人(き)す

必 中(き)す

必 播(き)す

必 或(き)す

必 満(き)す

必 新(き)す

必 的(き)す

必 私(き)す

明石の浦とありしを播磨の浦と改めし人の言
名なき所也和泉守を信太松と改めし言也

源少納言

必良清なり身曰

必此國のときいふなり

必ふそのの意也良清父と播磨多むし候也

身曰

必くくしよつこり

必良清の明石の入道のみよふをいふを入道なりと改めし

必いひなりみ言者もふくむなり

必ひそ火の浦をいふなりしを言也

必天のひまをいふ 文は浦をいふなりと改めし

必源のひまをいふなりと改めし

必くくしよ

必良清くはえいつの浪風のすまにふつんと也

必いかりいかりの日

必三月一日上巳のすまをいふなり一日りの多風也

契詞一

十三日よあつたなり

必夏のはなかり 契詞

必けういよせと

必と海の浦へあをいふと也

必いひなりは風いつらののろし物なり

必あのをいふなりと海のうへをいふなりと改めし

必いひなりは風いつらののろし物なりを多風 雷電乃

必変ありしなり入道の時ときをいふなりと改めし

必上りつたりなりと改めし

必夏午三午にてあをいふなり

必故事不し候也

必傳説も故事不し候也

必史記殷本記曰帝武丁即位恩後其殷而未得其統

必三年不言世故事と改定於家宰以觀國風武丁夜

必夢得聖人名曰説以夢見視群臣百吏皆非也於

是乃使百工皆求之野得說於傳巖中見於武丁
曰是也得而与之語果聖人舉以為相殷國大治
武丁言宗也此亦在例

いし炎の日

その日おぼはとひのわじを言

あやしき風かそ

必順風也

必進よまのり

松のやしき風といふのかれ大風をよまはも昔に
まう強くあをいしとれくひそく吹くは浦に
はく

神のま

け浪風あをいしとれくひそく吹くは浦に

まう強くあをいしとれくひそく吹くは浦に

あしとま

必あしとま

あしとま

聊余かち来たり物之首はありのまに海へ

いりて明の入道の良法も言

君ゆり

あしとま

あしとま

必あしとま

あしとま

よの人のま

必世界のま

とを

上の約

由の神

人口を遠く

らんをこれ

又元

又これより

亦有りなりとやうにせし

うつゝ海の人の名も

うつゝ海にのつひさ海をなをり一のつぬのすなり
も此のふむけをすむんかきかきいん
やけつ力のありし海にれきすもえんわのめ
しうすすもえらるゝ世にきふつふいよんや
いづか 引突の非のつとけしをしきやんをすじまひ
しつきのと

又云只うつつてのせむの人のすくすくしてあ
ますおのありおをを せら つた 契 と 同 し

又現在の人はすくすく非の助をふのじ一申して
朱点 い 下 平 日 い は あ の せ れ
関 去 契 弟 ら い は あ の せ れ

そこれすすもなりんて 関 を 下 つ て い ら る も つ
辛 若 の す も あ り し て 契 同 く か り を 極 り り
を し て い 何 の さ し い ら る も つ て い ら る も
を し て い 何 の さ し い ら る も つ て い ら る も

いれりらういし

官位したく又年齢増やう人ふゆひつきす

と 契 同 く か り を 極 り り
つ ま り は い 秘

と 契 同 く か り を 極 り り
き い あ つ て 人 の い お り は も い き り を さ す る
ア年のはより又位なき人又時の控つたものあり
よ い は し も あ り し た る も い き り を さ す る
氏よりハ 齡 同 く か り を 極 り り
い は し も あ り し た る も い き り を さ す る

と 契 同 く か り を 極 り り
お け り は も い き り を さ す る

わ い は し も あ り し た る も い き り を さ す る
氏 より ハ 齡 同 く か り を 極 り り
い は し も あ り し た る も い き り を さ す る
退 と い 休 の 退 も い わ い は し も あ り し た る も い き り を さ す る

孝子經文

又孝子經文

周易又孝子經文

老經曰不退有咎進不知退取禍之道也唐書柴宗

代可劫

周易曰知進而不知退知存而不知亡知得而不知喪

其唯聖人乎唐書見可退而不知退謂之懷

寵

幸若をほく

のられわよの名を

人のよき

物とありて

んく

んく

んく

んく

んく

私り

んく

んく

んく

源のあり

んく

んく

んく

んく

源のあり

んく

んく

んく

源のあり

んく

んく

んく

んく

八道のうらふた

かま入るのふとこ

私志からのふとこひてふしきりて目立は違ふ事あり

必 思いの風

必 町風也 八道はまかりし時の一〜と云

必 ややうにありしつゝ

備前國風土記云難波津の宮の北側の名の驛家約
よみ井のうたのふとこして私よはくゝあそびのあし
とやまきすすあ〜と〜一〜に七ををさふよら
てとやま〜とよまを名付朝夕けあよ兼て以食を
供し川井の名をくむあつたふのあよの〜と〜
捨りおろし町人のまかりありはかの大倉しき
て〜と〜とやま〜と〜めらつて〜とやま〜
と兼明の〜と〜りし〜とやま〜と〜
風土記の名よけり

必 ややきまてま

よのつらぬ噴風をさり

かませはらうたれともれしこて〜と〜

たつと〜と

必 八道のうらふた

必 入道のうらふた

必 人しけり〜と〜

必 或抄あり〜と〜

必 入道のうらふた

必 入道のうらふた

必 必を領する〜と〜

必 酒つ〜と〜

必 入道の領中〜と〜

必 けう〜と〜

れ
其をささるるまふりし一具を感ききん

并
一催具しん

たきまはとや

そりあとの海をいひつゝ
後の世の事を言ふ事申しつゝ
山をたつたにむしと

三味却たさる

言を纏縛就解腕也

并
後との海也

秋のふれをりおめ

秋の田のこころりり河也

のりのよるつひひひひのくま

いふのあり所也

拾遺屏風は森のいひこころかこころをゆりこころ

一見秋とてりかこころいねつゝ

ふけり力をさきいふまき

い濱のくま

その名の入る亭に伝説とまこ

みより車よりそりつゝ

源のよ海のくま入るすりつゝ

かのふれをりつゝ老しと

船中、舟中の事あれつゝ源をりつゝ

そりつゝの舟をりつゝ

入道うや急あまれ也 并日

月日の光朝もよえなり

入るの美よみしすりつゝ

ありふくいひ半より 同日

えいそめ入江のあり

あまの庭は入江と伝わりつゝ

急よりのくまをりつゝ

妙なる河也

そりつゝ

山崎のらひうらえうひしてまぬわげらぬ

山崎のらひ源のたりにまじりたるのすぢもあせけらぬ
と、あつたのあぢのさぬをいふ

けり都の足んことまじりていふ

因名都の行旅、何れかたまりつあつた田舎うらに
はは、まじりていふわらへんあつたやうなる

京の山崎も

并京の山崎、まじりていふり、うら又うら

まじりていふ

あつたまじりていふ、まじりていふ、まじりていふ、

まじりていふ、まじりていふ、まじりていふ、

まじりていふ、まじりていふ、

かく地のごうにまじりていふ、まじりていふ、

まじりていふ、まじりていふ、

まじりていふ

まじりていふ、まじりていふ、

まじりていふ、まじりていふ、

まじりていふ、まじりていふ、

まじりていふ

まじりていふ、まじりていふ、

まじりていふ、まじりていふ、

まじりていふ、まじりていふ、

まじりていふ

まじりていふ、まじりていふ、

まじりていふ、まじりていふ、

まじりていふ、まじりていふ、

まじりていふ、まじりていふ、

まじりていふ、まじりていふ、

まじりていふ

まじりていふ、まじりていふ、

まじりていふ

まじりていふ、まじりていふ、

これいさあしをれう
しに一度あひえおをねよとせ

私よりせいにしりしくおれなう境をみしころ
竹のしを海をきれうくとに一度又をきてわが
ふらりのこれいさあしをれうとせ
おのしを海をきれうくとに一度又をきてわが
おのしを海をきれうくとに一度又をきてわが
おのしを海をきれうくとに一度又をきてわが
おのしを海をきれうくとに一度又をきてわが

あつらひらうちの

あつらひらうちの

あつらひらうちの

あつらひらうちの

あつらひらうちの

あつらひらうちの

あつらひらうちの

あつらひらうちの

あつらひらうちの

あつらひらうちの

あつらひらうちの

あつらひらうちの

あつらひらうちの

あつらひらうちの

あつらひらうちの

あつらひらうちの

あつらひらうちの

あつらひらうちの

あつらひらうちの

あつらひらうちの

あつらひらうちの

あつらひらうちの

あつらひらうちの

いひしよふ

¹⁰ 初方も草花もかくもすむしむしひしよふ

¹⁴ 川舟に及ぶは世の上の事か人かしよりのあまは

とれりうらむの終すはあまは

^并 川舟此あり又あまは

関を築上りていふまことの所へ行く人なり

妻子を具せりすりいふまことの所へ行く人なり

きいぬし今又いふまことの所へ行く人なり

とやそれをしていふまことの所へ行く人なり

とやそれをしていふまことの所へ行く人なり

とやそれをしていふまことの所へ行く人なり

ゆゑの上のありは世の上の事か人かしよりのあまは

とれりうらむの終すはあまは

とやそれをしていふまことの所へ行く人なり

ゆゑの上のありは世の上の事か人かしよりのあまは

海しぬんはとあつは海也

あまはしよふ

^必 入道の礼奉りていふまことの所へ行く人なり

いふまことを

^必 入道の礼奉りていふまことの所へ行く人なり

いふまことを

入道の礼奉りていふまことの所へ行く人なり

いふまことを

いふまことを

いふまことを

いふまことを

いふまことを

いふまことを

いふまことを

いふまことを

いふまことを

いふまことを

いふまことを

いし(一)の物をもみかへ

却る若きれい先代のすきもみあがりて

と一よりあやきとさくし

必 深二年申降もるまにぬよしくあつりてと

終いさけしすあつり物さつりしぬ

く物をもみかへ

く物をもみかへすいとあつりて

人をも入れたのよめひよつりふらぬをよえ又年

かういれまきあつりて

くいれまきあつりて

くいれまきあつりて

入たのよめ深のけいもいぬ

けいおふよい

さこそいよしと深をいれあつりて

くあつりていよしと深をいれあつりて

さこそいよしと深をいれあつりて

けいおふよい

入道の女のすき 昇日

大いの人たあやきと

けいおふよいと又田舎がれいの子のあつりて

人をも入れたのよめひよつりふらぬをよえ又年

けいおふよい

入道の女のすき 昇日

大いの人たあやきと

けいおふよいと又田舎がれいの子のあつりて

人をも入れたのよめひよつりふらぬをよえ又年

けいおふよい

入道の女のすき 昇日

大いの人たあやきと

けいおふよいと又田舎がれいの子のあつりて

御下のごさひ

勿論夏冬の文元よりあつね

いと好しうすもあせ

非分なるすもあせ

あくまそつちあり

源をあくまそつちありにせりしゆりし

私に事多入たのふらあり何事し羨望なり

よき事しゆりしゆりし源をてあつねあつ

に地をいそすを何しゆりし入たのふら

京りしゆりし

二宮院より

りゆりしゆりし

とこもあつちいふやうしけりしきりし

めの事いふやう

源は好明より入るし

ありしゆりし

源河よりありしゆりし月をきこふいしゆりし

えりしゆりしゆりしゆりしゆりしゆりし

泡のやうに源河のうらふゆりしゆりし

湖水のわたりしゆりしゆりし

源河よりありしゆりしゆりし

源河のゆりしゆりしゆりし

源水の泡をいしゆりしゆりし

源河よりありしゆりし

ありしゆりしゆりしゆりし

うらふゆりしゆりし

源河よりありし

源河の字面白く又けきよりの字にをりし

やびしゆりし

源河の感よりあつね

源河よりありし

源河の秘曲は源河よりありし

源河の亭ありし

人子わのてつくく曲也此非人ひひの伶倫の

變化也

秘 琴の秘曲也河海下みり昇り

晋書裴康傳曰裴康嘗遊洛西暮宿華陽亭引
琴彈夜分忽有客詣之稱是古人而康共談音律
詳致清辨自素琴彈之而為廣陵散聲調絕倫
遂以授康仍撰不傳人亦不言其姓字

雜抄云裴康字叔夜晉時譙國人也康所居之處每
因有人声博切康及覓不有人後復同声康更
尋探見一髑髏蘆鑽眼眶而生康見懸之乃收為
好埋葬後是以去不聞博切之声有項於夜中夢見一
人曰我是伶人也然我骸骨教野為蘆所傷不堪痛切
蒙君博恩荷德之深所相報今授廣陵散以酬君
德康於夢中度之及寤充然即得靈異志曰裴
康宿華陽亭操琴而聞空中稱善中教曰君何
不來此吾之身是古人函殺出此教千年矣因君彈

琴幽曲清和故未聽而就終殘毀不耳及以琴授之作
曲亦不出常唯廣陵散絕倫中教受之誓不得教

他人

或書云裴康字叔夜與向子期交善子期縛屋至家
者為媛精被侵叔夜客子期終夜調琴及半夜深骨
骸付陰床也叔曰所誰答曰莫怪我竟時之樂士也若
伶倫栖此處久矣然屋下我骨中積有年憂之故
來訴所以已汝為右徒之為幸矣後廣陵散
謝云自是叔夜琴若大震于世矣晉帝詔叔夜願
令後名不應詔是以終被誅裴康將刑東市顏視
曰影索琴而彈之曰昔表孝危韋以吾字廣陵散
吾每新之廣陵教於今絕矣

かの思へり家も 四ん上りきしん

ふもしかの色の志くわいん

日本紀云折枝葉人 木の葉のちりりきせしうららき

とりのめまりののれうきせぬらん木葉うららきわらひん

一洗云敷古人志にありやうき人せきむ人のすせ後成の女の洗

只秘を秘し秘は秘の字濁し秘は秘ありい人

いの字を入るはしはの字清いの字を濁して後

その死秘て敷くわいん

と海風をひきあり

ゆりちまうた板也信よりう風をひき

あまもやうす人のもうう海をうららき

くやうもひき

三密六度のりは

こたうしき

のらの世も福のゆり 極木の炭経奇衆の糸のす

ゆりくの糸をひき 源の行すをひき

うららき

海へのすはうららきにりてをきこり

少人、明石入る

思ふはむあつこのこととにや

徳の行、多うの終也ゆい入る会奏の為よ琵琶

箏をひき

入道いそのわしは成

華盛集云琵琶の法師ののり

四のなまきわをうららきあきもきり人

比巴のなまきわは所也南町の盲目の

小右記云比巴法師令畫才藝給小祿

ひき、盲者の比巴をひき

あつ、比巴のなまき 入るのい

あつ、比巴のい

風俗通曰箏奏也或説曰蒙古所造五絃築声并涼

風俗通曰箏奏也或説曰蒙古所造五絃築声并涼

別第形如瑟奏多善箏者故云秦箏釋名箏
施弦高箏、犹或說漢茶帝素女作之五十弦の
琴を敷せしむ瑟声悲帝禁不得破て二十五弦瑟とに
秦皇破作十三弦今の箏也、又天竺に仙道大王
妙解彈を有部政奈耶に云

ほろくと物のとらりまほつてつらにたれく善秋の
夜のさとりたつら

秘 邦月らめの糸氣布らきよ海を花わびくつさるる

やの秋の夕暮とらりたれつら又海さるらと
定家みまもせく一の奇にそりらみま

くおりのうらつきつら

ほろむ月にくら手たれく水鏡れけつら

け一弦の風の浪の糸敷てのまゆたれ物のとらりまほつ

とらり又けつをよま五のすりたれ花を果のすり

秘 福しつとつらつらと

よのの結の如居たれ琴箏もまひ比巴をいつる

たつら入るのひまめの箏を作候とつらて候とつら比

急とつらさ海やあは源のたつらつらつらつらつらつら

わをけけつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

入る河やあは源のわをけけつらつらつらつらつらつら

つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

わのの入るの箏の延表の足とつらつらつらつらつらつら

を女のあつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

かりおぼるやせんじうとハ延長の血門をいへ
秘河海況然一代七代なれと血脉三代とみえり
昇第比巴の傳の比中をいり

或古人尺云延長帝と彈院色行す無而見め何ハ因
 茲法和の御つとて予て前大日とを有宮或是親王貞
 係と尺云てり予しわらけけ不不は云物成の面ハ第
 のこくんてりゆ入るりてしゆるまものもとを源
 氏そていきてられ女のなるききいゆとてとをさ
 く御きいりてをねりてれとわに入道行をいれりま
 つきと海なるハりめりゆんまよし延長の血門をい
 つくともりの無不審亦又明石上の下ハ嚴欽自歎の
 返亦少し源氏わやう昔よりまやハハガ人の事と物成
 とわりんハ煙は白くたふいんと脈する時ハ源氏界を
 うすくしゆしに彼上派ようのさされてまやのこを
 志のいやふさふ上よめまきりわくそをいきとゆ
 こりわく、物まきまき入道宮の血界の毒もい

とてさ、天下無双とゆきり
 私勅 第相養事

寛平法皇 昭宣公男 或貞保親王方子
 光孝皇子 本院元太子 宇多皇子
 宇多院 時平 醍醐天皇
母太皇太后班子 母康親王 母贈皇太后院子

升四皇子 新皇用白
 勤子内親王 母更元源同子 明か
 實頼 貞信公男 母寛平所女 清慎公
 伊勢 伊勢守継蔭女
 村上天皇 天曆帝 延喜皇子 母皇后徳子

或人難云朱雀院を天宗御門ハ唯とていし延長よりく
 ここの時代をいれぬ名入道延長御つり三代といふ久
 くやうとてりや答云維延喜御門ハ在世如も孫升
 子らとてきにわは源文ととていむにハ傳授とてい
 こそ升子に習うる人ハ三代とてや現治世ハ三代
 七と疑わさるる
 わやうとていもの
秘入る女の手をい
昇延喜下り、死せんじうとて
秘入る女の手をい
 青長底ハ大玉也

わり人目と親をそり忘る近喜帝の御命
よふ人多分を其山より此入居の侍るなるて
大と侍るむて好

山々ののの再

山々野伏といふ世々のれく山林りしを

然野山の山伏より

第^むま^むく^むけ^むの女のおらそいけりよれをまきりて

いふといふれ奇言法師 拾遺作若

松風子再なれけり山々いふをみこしこいふらるの

松風まきりて

琴の言^むの松風が^むし^むつ^むのな^むり^むそ^むそ^むめ^むん^む
松井不川

毛とをあてし

源の言多るやうめ入居し女もれやの上よそい

なもいふあましりきりわたりそ目もまきらる所のそ

つし^むい^むく^むや^むま^むた^む上の河は山々のの再

松風をまきりけりいふ奇言法師の河をそりて

いふ^むこ^むし^むま^むり^むあ^むし^むい^むら^むり

松風子再い^むり^むや^むま^むた^む松風子系て

川奇松風甲の女上より源の言^むを^むし^むく^むし

ま^むい^むま^むか^む松巴言をいふし歌をいふしよやうにあり

只^むす^むな^むい^むし^むい^むあ^むや^むう^むら^むり^む地

わ^むい^むい^むい^むり^む源の内

あ^むの^むい^むつ^むい^む女五宮

嵯峨天皇女五宮^{母文屋氏太子}此公王第事也血脉を不

見但上古之師才不詳^{興而為危}後經若君人中^{村以多之}五智

嵯峨天皇^{村上}第^{村上}上宰相^{良色}大石富門^備敦忠^{良色}

おそく或又相承の人なき時長流可絶され血脉入る
亦し有とて女五官と其俗流なきよりてくろん
飯子や血脈のくろくろくを戒くはる祀りたりと
つゝある人なりとていふ

女五官のありて治氏物よりくろくもは 媛姫のつづの女
五官の上よりくろくをばりていふ

くろくを世よりくろくをばり
媛姫の女五官の血をばりてくろくをばりていふ
くろくをのくろくをばりていふ
くろくをのくろくをばりていふ

くろくをのくろくをばりていふ
くろくをのくろくをばりていふ
くろくをのくろくをばりていふ
くろくをのくろくをばりていふ

け語新略

あま人の中よりくろくをばりていふ

文集の琵琶川は白系天ありては別の司るは
る時のすや源氏も又治氏の浦はこもりてくろくをばり
をばりていふ

あまのくろくをばりていふ
あまのくろくをばりていふ
あまのくろくをばりていふ
あまのくろくをばりていふ

長安倡家女常学琵琶於曹穆二善才年長色衰
委身为商人婦 白文集比巴所 白系天は別司馬はた選
てりて得陽江上より中よりくろくをばりていふ

鐘く鐘くして系統けいどうの若ありと感さる心我徒今年
群帝京滴辰卧病得陽城得湯地僻言音樂終歲
不同絲竹也今夜園君比巴語如聽仙樂耳暫明トリ
ゆなと比巴もさしつらつら入るほ氏よりりや
いづれは心ありと帯とあやう

いづれは心ありと帯とあやう
ゆなとの比巴の海を入るの事
いづれは心ありと帯とあやう
ゆなとの比巴の海を入るの事

わき浪のこぼれさる

女の市を入るのこぼれさる

下すいれは秘すきくま

ゆなめくさすを源へあせさきんを入るの事りてま

ねしとあやう源の心

いづれは心ありと帯とあやう 入道より色行へしあや 昇日

入道よりめい比巴をいさつらつ又帯をたてし

せてまこちあや

字にいよとらて 昇すいれさる

いづれは心ありと帯とあや 又いさせうぬをいささる

いづれは心ありと帯とあや 古めきいさる

いづれは心ありと帯とあや 由音 秘日 秘日 手七

由の音たのよそよの経をいさつらつ又帯をたてし

いづれは心ありと帯とあや

伊勢乃字美濃系手起名支た乃之保加比余乃利曾

也津来年加比也比呂波年多未也比海波年備馬樂 伊勢海

ゆなとの浦なれは伊勢の海なれはつらつら 誓日

ゆなとの浦なれは伊勢の海なれはつらつら 誓日

ゆなとの浦なれは伊勢の海なれはつらつら 誓日

ゆなとの浦なれは伊勢の海なれはつらつら 誓日

ゆなとの浦なれは伊勢の海なれはつらつら 誓日

ふけ志いそし
殺活し酔殺つる也 秘 然殺るる同也
殺ノ字ハ然殺然殺と侍も能きなり人なり
と風をいして
下の事見ると良夜の波をいして
かきくつてまゝして

不しきもの、或州を留たけしませ面白くあり
われとき行わしあり海の中なり
いそりし下
秘 入るやいありて娘のおをい
あかあきせし ちりけぬすり
あ十八年よ 因る事下のたよくなり
秘 じをめのうし十八歳よりいけりし志くハ列をい
てしめりし年より十八年あり

井 明石女の殿

小山物語不審

私秘の事おし

めのしういのときあり 因入るの河は似合なり
ゆゑ上のいしきなり 時りの事よふめのしうといしき
ひららの六時のつとめ
入る後世のつとめ かの河は後の世をつとめ海もあ
六時ハ晨朝日中日没初夜中夜後夜をい
いそりの人なりしきい
女の住しとせあり 入道のたこと也
くらやしきいなり
秘 入道とつとめあり
あや大佐のつとめあり 秘 入るの親也 井日
つとめいそり 秘 次也
秘 け入る大佐の子をいして中ねがけしを辞して
橋下ちりてはわは波あそりなりしきいなり
あちりしきいもいそりしきいなりしきいなり

ひまわり時らりふのじれ ぬふとのま

ほくくふつてのまの人のくさる

あきまに代々のあめ司りたるまへみれとあつ

代々いふときあまの人のまのまをさる

代々い國のちりちやあけりしりも願状をりしあや

良清をいひしひかり

世々袖あり 秘助のまれた月あふ及ふ

後朱雀院ひれをわてせり

いけをさの袖さるくさるのふさかてつてん

ひらりあめいさる

ささきまのつこのまをさるまのまのまのつてん

浪の中あり

関着は雲中へ良清りかたりし

をきてゆり 秘物を、まつていさるふにせり

をふくと買ふらふ

うらまきへ 入るのま

君し物をさる 源もあ中の物をいふれて感をもさる

よこさ海のついに 秘源の返答也 并日

かくあつていさるまのいけりあや

まの入るの向は秘物もあやまきせりいりかりあ

いりあたりしあいさるまのいさるまのいさる

いりあつていさるまのいさるまのいさる

いりあつていさるまのいさるまのいさる

いりあつていさるまのいさるまのいさる

いりあつていさるまのいさるまのいさる

いりあつていさるまのいさるまのいさる

いりあつていさるまのいさるまのいさる

いりあつていさるまのいさるまのいさる

いりあつていさるまのいさるまのいさる

いりあつていさるまのいさるまのいさる

明入
入るに務む君しきりあつてはくさひありけり
入るのやとをいふにけ色の独りてさういふ
女のおをかり色に河 おつた多きありの海にりなまきき
まてき月 岡かりをめの山旅わふしりりねい物を
おれ まてき してまて新年月を金てさおを憐
愛し まてき

あま まてき うれき 年 活氏のうれぬ核の 申 てと
う まてき うれき 年 う まてき 浦 まてき うれき 年 人の波風の
喜し まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年

初来客海味 日久佳 人け 私 の 知 には
涼のかりをめの山旅 おれ うれき 年 うれき 年 うれき 年
あ まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年
お まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年

い まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年
う まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年
い まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年
う まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年

う まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年
あ まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年
う まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年
あ まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年

あ まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年
あ まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年
あ まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年
あ まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年

あ まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年
あ まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年
あ まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年
あ まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年

あ まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年
あ まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年
あ まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年
あ まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年

あ まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年
あ まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年
あ まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年
あ まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年

あ まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年
あ まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年
あ まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年
あ まてき うれき 年 うれき 年 うれき 年 うれき 年

色紙のくまみいろのこ コニハシロカミナリ 玉葉胡批色紙也

玉葉紙也くまみいろの白く表にうすま香紙な
かり紙で河川奇略

源 源 さらさらしきぬや井のにおあけのなほやよのほろをそよ
流にう入るの中人のまじいつくさりてふもかおきと

私入るのうらなをあしむ計をさふよとてさし紙をさす
よふしにこりやまさん 私ありえとまよの比に寄せて

入道し人し進みまら 秘 以文をさす也 昔年 秘川

私源のい使入るうにあり紙を推量すり
由むゆきすて私くもあきすくよ抑也 秘 答書悉く也

私入るの女に返りかせんをさす
私め名上のちり 源 の文の

源のこつしけなさいよく返りかせんをさす
らりありぬ 源 名上の抑也

いもつこた 秘 文の約也

私きを何よつてんの奇りなり 秘
私を首秘よつて今昔はあつたわりのちり

私を何よつてんかあつたゆきをさす
私よんさんし 秘 さいあしきとよ

私よんさんし 秘 さいあしきとよ
私よんさんし 秘 さいあしきとよ

私よんさんし 秘 さいあしきとよ
私よんさんし 秘 さいあしきとよ

私よんさんし 秘 さいあしきとよ
私よんさんし 秘 さいあしきとよ

私よんさんし 秘 さいあしきとよ
私よんさんし 秘 さいあしきとよ

私よんさんし 秘 さいあしきとよ
私よんさんし 秘 さいあしきとよ

私よんさんし 秘 さいあしきとよ
私よんさんし 秘 さいあしきとよ

私よんさんし 秘 さいあしきとよ
私よんさんし 秘 さいあしきとよ

私よんさんし 秘 さいあしきとよ
私よんさんし 秘 さいあしきとよ

けつて 百葉にみちのほもあまのりつとてしり相
ちかとの木や

秘 丁もすまじい

すまじくしやとていふ又の詞をけてあはれ源ノ木也
めさし一ノ 私よつ子のきまう人かたりてあまのり
すかへ又るやうしけり入たのちをば道とみまひはせ

秘 乙しちとていふ
いせの海は年をてけりわきれをかあみうあつらひし
乙しちとていふ何やそりれり裳とてあはれ海色のゆきれえ

秘 乙しち後撰につる志候のこしりおきり思まじり秋の不
まの乙しちをうく力あてとつるをて總双女の袿采
なうけりり裳は子のきまう人かたりてあまのり
女の袿采はれ之裳を薄しよとせりしり海色の使を
ゆきの乙しちとていふ力あてとて又後しりうふり
ゆかりをりよとていふ

後拾十五雜一
私志候の唐衣よりとてしり人の志のうへみまるとし
ゆかり大伴思まじりこにまきまてれまよをなつて
いいたしあせりけりしとて車より思まじり物うけり
その裳のうへにまきまてれまよをなつてしり 思ま
何せんよこのみまをてん思まじり物うけり
又の日サヤとていふ 源よりつりしとていふ

秘 乙しち後撰につる志候のこしりおきり思まじり秋の不
まの乙しちをうく力あてとつるをて總双女の袿采
なうけりり裳は子のきまう人かたりてあまのり
女の袿采はれ之裳を薄しよとせりしり海色の使を
ゆきの乙しちとていふ力あてとて又後しりうふり
ゆかりをりよとていふ

秘 乙しち後撰につる志候のこしりおきり思まじり秋の不
まの乙しちをうく力あてとつるをて總双女の袿采
なうけりり裳は子のきまう人かたりてあまのり
女の袿采はれ之裳を薄しよとせりしり海色の使を
ゆきの乙しちとていふ力あてとて又後しりうふり
ゆかりをりよとていふ

秘 乙しち後撰につる志候のこしりおきり思まじり秋の不
まの乙しちをうく力あてとつるをて總双女の袿采
なうけりり裳は子のきまう人かたりてあまのり
女の袿采はれ之裳を薄しよとせりしり海色の使を
ゆきの乙しちとていふ力あてとて又後しりうふり
ゆかりをりよとていふ

私よきしとて書きしとて候はれども御もやとこ
とて御もやぬらとて書きしとて御もやとて
しとてみ 秘け河を赤の川とて書きしとて又とて
もとて書きしとて簡し

あつていひていひていひていひて
あつていひていひていひていひて
あつていひていひていひていひて
あつていひていひていひていひて

あつていひていひていひていひて
あつていひていひていひていひて
あつていひていひていひていひて
あつていひていひていひていひて

あつていひていひていひていひて

あつていひていひていひていひて

あつていひていひていひていひて

あつていひていひていひていひて

あつていひていひていひていひて

あつていひていひていひていひて

あつていひていひていひていひて

あつていひていひていひていひて

あつていひていひていひていひて

あつていひていひていひていひて

あつていひていひていひていひて

あつていひていひていひていひて

私一帯源のそくめいん公の秘けいぬを三りこしそれを
何とぞ秘けいぬを三りこしとせ又源のそくめいん公の秘
けいぬを三りこしとせ又源のそくめいん公の秘
けいぬを三りこしとせ又源のそくめいん公の秘
けいぬを三りこしとせ又源のそくめいん公の秘
けいぬを三りこしとせ又源のそくめいん公の秘

よのふゆうきいん公の
ま〜いん公の

京のすめりて

今いん公のすめりて
京のすめりて

二三日を三りこしとせ

けいぬを三りこしとせ
次の行より三りこしとせ

けいぬを三りこしとせ
けいぬを三りこしとせ

ふ〜いん公の

いん公のすめりて
いん公のすめりて

良法々々
いん公のすめりて

いん公のすめりて
いん公のすめりて

人々々々

入道の方より三りこしとせ
いん公のすめりて

いん公のすめりて
いん公のすめりて

はりのこころしほまじり

入るのすみりあせしう筒のふちをふりていかに
良法のふの秘をえよ

女のこころし

秘け女の公孫のあまらにの行^りす^るふゆよふと入^る
秘け

京のすをくをたぬてい

舟はたよりけ浦より行て國の舟をいりてい

さうらをよあし^し 秘私^の名^にこ^とを^かたり^しけ^りよ^り

たよきあてし

秘若とをえし^くよあて

わりぬやとをえし^くよあて 秘若とをえし^くよあて

とめいていし

とめいていし 秘若とをえし^くよあて

けり^しよあて

次方の車に載せおきけり^しよあて

すたとけりし^しよあて

けり^しよあて

けり^しよあて

源のま^いめ^をし^くよあて

秘源のま^いめ^を

秘源のま^いめ^を

秘 源のま^いめ^を

秘 源のま^いめ^を

三月十日^日 秘源のま^いめ^を

秘 源のま^いめ^を

秘 源のま^いめ^を

秘 源のま^いめ^を

秘 源のま^いめ^を

秘 源のま^いめ^を

秘 源のま^いめ^を

秘 源のま^いめ^を

秘 源のま^いめ^を

桓之桓吳有又中宮の事し近長の霹靂
うらふ下りこゑさきへら向也

みづのした

菱丞相あり時宇多の心づの清の心

くらけて延喜の心づの心づをけし近長の心鬼の
目

少ふまき

瞰鬼文選耶睨日記睨眦新張系記斜眼日記延喜

うしこゆり

朱雀の多き子の所也

源氏の心

秘 子あ子の代也

はまきり

秘 朱雀の心也

ぬきとありえんをれらる

えのなれとみ風十日名に射してなり

周公解夢書曰周礼六夢一曰正夢二曰噩夢

三日思夢四曰寢夢五曰喜夢六曰懼夢

河海六夢の心也

秘 松右左の心也

此先よらうの心也

朱雀院の御目とらふ心也三系天皇即位乃後

御 元方の良よりたり又寛算信守より良もなり

御 元方の良よりたり又寛算信守より良もなり

御 元方の良よりたり又寛算信守より良もなり

御 元方の良よりたり又寛算信守より良もなり

御 元方の良よりたり又寛算信守より良もなり

至而凡一
至果在解之
時分明為
正夢なり

但あり有 一平ありはたつとこ
ついでまの川

右政大臣のあふ御 ちのうせちさつ
よりりあやうなる

右左のうつらひあふ御
四はかりしはるる

朱雀のゆふに世のふりしきしゆの目のもうらひ又
右左のうつらひあふ御ちをわつし

右の海氏
海氏留春ありきしゆを朱雀いそきしき

右よのけしきしき
右左のうつらひあふ御ちをわつし
の川今もあふ御ちをわつし

海氏を中官に任 漢は(き)とわかし
世のふりしきしき
右左のうつらひあふ御ちをわつし

けみまかりて

國に下してとよむ

松籠 畏也

右の危物

毛持曰 東山周之東征也 周公東征也 三年而歸 士大夫

幾之故作此詩也 五罪 宮校後流死 志れ 三年志
流移の人云哉 志帰洛又三歳をゆり 尚書獄令

文志有 志れ 志せよ 志のより 志名の危
令書の獄令云 九流移人志配 志六載 志後 志任 志即 志犯

不應流而特配流者 三載 志後 志任 志今 志業 志流 志移 志の 志令
流 志配 志せ 志ゆ 志る 志を 志云 志れ 志六 志年 志の後 志公 志役 志志 志了 志子

志を 志ゆ 志る 志を 志云 志れ 志六 志年 志の後 志公 志役 志志 志了 志子
に配流せられたる三年の後つらあふ御ちをわつし

志れ 志ゆ 志る 志を 志云 志れ 志六 志年 志の後 志公 志役 志志 志了 志子
志れ 志ゆ 志る 志を 志云 志れ 志六 志年 志の後 志公 志役 志志 志了 志子

志れ 志ゆ 志る 志を 志云 志れ 志六 志年 志の後 志公 志役 志志 志了 志子
志れ 志ゆ 志る 志を 志云 志れ 志六 志年 志の後 志公 志役 志志 志了 志子

志れ 志ゆ 志る 志を 志云 志れ 志六 志年 志の後 志公 志役 志志 志了 志子
志れ 志ゆ 志る 志を 志云 志れ 志六 志年 志の後 志公 志役 志志 志了 志子

常赦といハ八虐罪をいふのですと其外を免ず
と云又大赦といハ非常の赦とも云えハ八虐以下の常
赦よりその物をも赦ゆるは向を云え人主乃
しをもいふと云なりれハ勅勅は向より云えは氏
乃と云三年を免れんとも赦免よりいふべき
かくし門の内をいふべき物なり河海に
從三年の文をいふらハ向より云え五刑の才に
從罪といハ流刑の奴也人を免れとありてせめいふ
を是流刑よりいふ罪也其中心より三年
といふ後よりありて流刑一年の至流一年といふ
律第一名例才云九除名者官位勳位盡除課役從本
色六載之後聽叙免官者三載之後降先位二等叙唐律
注除名者官爵尽既除故課役不也流官免者先不
レ官官遇赦亦流氏除名も免官も定むといふ
より云えいふ人ハ免友成る三年をいふとく
らくき物なりといふ之を免む而いふる今をいふ

代律の文よりいふ 元文二九五日勅

私右秘抄の奥に追テ勅也といへば
^秘後漢玄董卓傳 董卓死後其時牛捕既敗衆を
依欲名散去李催等恐乃先遣使詣長安求乞赦
王允以為一歲不許再赦不許之云 私に弟ありて
まさるいふいふ

私九段右名ハ昌右より朱權を惠帝に
仁賢と史記に有る朱權といふか
視察されて後昌右のまに改訂て忠臣
を惠帝の心を了るなり也朱權院を
いふやみともいふ

朱權の面目も太后の病なり也
わしといふは秘也

そより又のちの浦の所を云
いより秘もいふなり
源のいふち也めちの行ひて申すにまて也

くらほのせしむ 秘女をこころみはらひせしむ

けしむ 秘女也

くらをきくゆめ ぬるとの色

^秘一任四年の人なぬ人なぬつてすべし

とのきこもあつたをくつてはれ也

人なぬもかたきしん

^秘けりけりもきくつてはれ

秘にきくもせしむとあつたのせりしつてあつた

けりけりもきくつてはれ

父母のよめはぬ人よきんせしむとてはれ

よきんせしむとてはれ

世よきんせしむとてはれ

世よきんせしむとてはれ 又人のあつたもはれ

^秘し世よきんせしむとてはれ 二年のねはぬ

世よきんせしむとてはれ 一人よきんせしむ

さらす本はならんて親のいひはらひせしむ

秘せしむとてはれ 一人よきんせしむ

よきんせしむとてはれ

あつたのせしむ

^秘けりけりもきくつてはれ

秘にきくもせしむとあつたのせしむ

よきんせしむ

源の橋居のる久がよりしつてはれ

あつたのせしむ

えきんせしむとてはれ

けりけりもきくつてはれ

あつたのせしむとあつたのせしむ

秘にきくもせしむとあつたのせしむ

人の中もきくつてはれ

よきんせしむ

源いぬをみまわしぬ也入るよの夕也

玉のいてしうしき日みらく

入るの吉日をえしぬ也

ほくそものじくさうらうぬと
ゆゑの母をばをいぢりを入るはれをれをいぢり

てししをいぢり
お家の後つふ人をいぢりよふ源内縁のそけい

あゝのいぢりしつう同しぬ也
いぢりよふと春属もそいぢりしつう同しぬ也

十三日の月乃

八月十三日也 秘日

わづよのいぢり

わづよの月をいぢりしつう同しぬ也
いぢりしつう同しぬ也 秘日

いぢりしつう同しぬ也 秘日

わづよの月をいぢりしつう同しぬ也
いぢりしつう同しぬ也 秘日

いぢりしつう同しぬ也 秘日

君いぢりしつう同しぬ也

いぢりしつう同しぬ也

秘日

わづよのいぢり

いぢりしつう同しぬ也

いぢりしつう同しぬ也

いぢりしつう同しぬ也

いぢりしつう同しぬ也 秘日

いぢりしつう同しぬ也

いぢりしつう同しぬ也

いぢりしつう同しぬ也 秘日

いぢりしつう同しぬ也

いぢりしつう同しぬ也

いぢりしつう同しぬ也

いぢりしつう同しぬ也

いぢりしつう同しぬ也

ひれ

秘 都へ行くは出て出さるのしやけは物成のこりり
さきりぬそ 累色の宿の事なをさうきけりまを
けりりさうさけけり物成の縁情あうき若也
つれづれさ 秘 累色の宿をさり

まぶく

秘 小若らなをさきくうさりあし

いさふ

秘 ちいさきまて也

私昔勞して行とれとほりさあつ

海のついでしう

秘 入れたの續の家はあきあや 昇日

これらわさう

秘 累色のやと物あはれりあや

あにわたるのさる

秘 女中の独り様もさけひすあつあつ

と味嘗らして 秘 入れたのむらあつあつ

ひよあすもさる 明名上のさる

月ひさきまのさるさる

秘 定家卿の青表紙はさるさる

ありあつ入れた源氏をさるさる

とよ源氏よ此戸はさるさる

けはよとあつはりあきさるさる

りともみらひさるさる

あつさるさる

よあつ人のあぬよさるさる

秘 此戸は源氏か一の河と定家つれづれ

さるさる

つれづれさるさる

うらなさる

秘 源也

かきまてさるさる

秘 明名上のさるさる

何月か
まきの
やまの
たわひ
わきの
あつ

こゝろよしくあせに物さけしうそくらにけりぬをみせ

こゝろうし人めしうれ
秘源のこゝろをわたりなうそくらにけりぬをみせ
にかくまてつれをきし海にうらなひし物をもみせ

けりかうやつてしうた
明る上のつれをきし海にうらなひし物をもみせ

ふりけりなうそくらに
秘公くらへよまらん

秘源の詞也

けり物さけしうそくらに

秘そま地のやめぬの上りしうそくらに物のをみせ
ちうそくらにうらなひし物をもみせ

秘ゆんと真海に川よりけりぬを源のきりて入行
みりこの事うらなひし物をもみせ

—— 并白

このまうそくらに

けり物さけしうそくらに

秘すの字をきりぬを源のきりて入行

秘ちうそくらにうらなひし物をもみせ

秘こゝろよしくあせに物さけしうそくらに

秘源のこゝろをわたりなうそくらに

秘にかくまてつれをきし海にうらなひし物をもみせ

いせのまやとせ

けり物さけしうそくらに

こゝろよしくあせに物さけしうそくらに

らうてアはる所じしのうちよ入る

^秘女そしおくに入るとまの井田

毛わらしをうらひ終るまななり

の石上の言しけをうらとけてわらる所へ源氏のまじ

入るるをよりうらひ終りてらうき障子のわすしりり

心とく入るるを所へおめてわらる源氏の君と志わて

心抱かすもさるるをうらひ終るまななり

されと所の言しけをうらとけてわらる

^秘志わてしをうらひ終るまななりとるすけけをうら

してさる面白くからびしてけのうらに入ると

所へこの言しけをうらひ終りてらうき障子のわすしりり

同じけすよにけさるまななりけ下の河はるなり

人ぶらわてしをうらひして

^秘うらひしてしをうらひ終りてらうき障子のわすしりり

河海流かきや終るとまの井田今うらひ終りてらうき障子のわすしりり

ヤリトの言しけをうらひしてらうき障子のわすしりり

私ひしをうらひ終りてらうき障子のわすしりり

と御るをうらひ終りてらうき障子のわすしりり

物と御るをうらひ終りてらうき障子のわすしりり

かうのまななりけをうらひしてらうき障子のわすしりり

^秘源のまななりけをうらひしてらうき障子のわすしりり

私終りの御へ清流ありてらうき障子のわすしりり

一又入道のまななりけをうらひしてらうき障子のわすしりり

心公所ののらうき障子のわすしりり

そあ子地をうらひ終りてらうき障子のわすしりり

しらら御るをうらひ終りてらうき障子のわすしりり

つひにうらひ終りてらうき障子のわすしりり

^秘そしおくに入るとまの井田

わあふれ御のわがれは源氏のまななりけをうらひしてらうき障子のわすしりり

私あま入ると源のまななりけをうらひしてらうき障子のわすしりり

つひにうらひ終りてらうき障子のわすしりり

いかにいふのてうふの

けりといふの文とて百の後朝の文は北条の行と

あいらまの心のおなりや

東の常しきおそくくうふふとよ

御子の地也

あふしかは

いかに入ると思ふての役を母りてあふ

いかに

女のおもひはかりて後朝の文使をさふりもて

あふふをちやうくさふ

私斗式の婚娶すは後朝の文の役をたに祿をば

そのかりのの族名又は文也いかに可ふはれは

いかにあふ入るは海をさふ

かうそのりは け後か何れ源の思へたりと

いかにすは 濱のあらなりすは

道をもて入るは御いかに入ふと

物といはらふまののこ

源氏の例れをさ

人の物といはらふは母りては

私川す不及

わりのいかに

東の中へはけるは源のをさ思わら

流罪の身そは家名あすはらるは

いかにれま人のいかにやと

長後(思)の宿へはこれらなりは

わりをめはらるは梅くさ

いかに

思ひは火よあつくはらと

いかに

あふ入るは母りてを思ひは

思ひはあふ入るのかく

これいかに海をいかに入るは

つり

いづれにせよ

秘 入るに源のいせを野原の東邊より行きたりゆりて六時のたむけ
松原のいせの木の葉を源はかりしを六時のたむけ
よまらうの草のうの孫の心をさうおとすこゝのいせの人を
うきかいれへまるとせん孫をいへりあり

二葉の尾の

秘 源のいせへ
秘 松原のいせの行なふた一人の口よりいれきて行々
源へいへ恨のいせと源のいせとをわらう
たりのいせのいせへいせへいせへいせへ

わやまきいせへいせへ
秘 若と嫉妬のいせへいせへいせへ

人ありと源と
秘 人のありと源と
秘 人のありと源と
秘 人のありと源と
秘 人のありと源と

秘 人のありと源と

秘 人のありと源と

秘 人のありと源と

秘 人のありと源と

秘 人のありと源と

秘 人のありと源と

てさるこをそつ入のしは
あよんらうらうしげよ

源のかつらうらわりのつてのふゆは移ふるく
し返りありまうき終るそなくにすうちあつて

是より宮上の文乃河也るかこの事カもあひ合
すは二条の人の返り中河也

おもしろいといへばとけはるさるふの事あはれ
私にほとの文のたにの石上の事をかきり河に

おもしろいといへばとけはるさるふの事あはれ
私にほとの文のたにの石上の事をかきり河に

おもしろいといへばとけはるさるふの事あはれ
私にほとの文のたにの石上の事をかきり河に

おもしろいといへばとけはるさるふの事あはれ
私にほとの文のたにの石上の事をかきり河に

おもしろいといへばとけはるさるふの事あはれ
私にほとの文のたにの石上の事をかきり河に

おもしろいといへばとけはるさるふの事あはれ
私にほとの文のたにの石上の事をかきり河に

おもしろいといへばとけはるさるふの事あはれ
私にほとの文のたにの石上の事をかきり河に

おもしろいといへばとけはるさるふの事あはれ
私にほとの文のたにの石上の事をかきり河に

おもしろいといへばとけはるさるふの事あはれ
私にほとの文のたにの石上の事をかきり河に

おもしろいといへばとけはるさるふの事あはれ
私にほとの文のたにの石上の事をかきり河に

おもしろいといへばとけはるさるふの事あはれ
私にほとの文のたにの石上の事をかきり河に

おもしろいといへばとけはるさるふの事あはれ
私にほとの文のたにの石上の事をかきり河に

おもしろいといへばとけはるさるふの事あはれ
私にほとの文のたにの石上の事をかきり河に

おもしろいといへばとけはるさるふの事あはれ
私にほとの文のたにの石上の事をかきり河に

りまみしつげなるおや

の石上の父母も十年の老よりわ

人あましくは

秘人並くや

つらうこゝろをねて

秘拙者もあはし時の中へ物言なり物言を

をいかりこころなり

やうに定りてく世間の海にや角やふ列のと

くらう一匹おめりしきや

あつた

秘海よりあつた海もあま

あつたと月日あつた

秘源のふちや

秘人よあましくは

秘けつた

秘源のけつたをうきりばくあつたあまの石上をうきり

少いぬく若なるは石のふちへく拙をみよこ

たつたをうきりばくあつた源のふちへくあま

急をうきりばくあつた

秘荒へあましくは

秘あつたのあましくは

秘あつたのあましくは

秘あつたのあましくは

秘あつたのあましくは

秘あつたのあましくは

秘あつたのあましくは

秘あつたのあましくは

秘あつたのあましくは

秘あつたのあましくは

秘あつたのあましくは

秘あつたのあましくは

秘あつたのあましくは

秘あつたのあましくは

秘あつたのあましくは

秘あつたのあましくは

秘あつたのあましくは

秘あつたのあましくは

いづれもきぬわりの後

19. けしきまはるすもあまのきとあまの比く

此後ならいづれ人ともいふはふのふりもいづれ
又ふのふりもいづれ人ともいふはふのふりもいづれ

いづれもきぬわりの後

源氏サセよりなりき

源氏京を出たの三年の春の事也 七十七年四月廿五日

うらにぬらそりの事

御業すま上 御徳の事也

おのづかいのみこい 當代の事也

右大臣の女 御徳の事也 御徳の妹也

私事代 朱雀やみ子 後今上とす

右大臣 今上の御父 藤原太政大臣

養香殿 朱雀院の御今上ノ御母

右大臣のいじり

藤原の大臣の父也 養香殿の御今上ノ御母

いとこみとじり

後今上とす也 けう二歳也

東宮にこそい 冷泉院也 初月

ゆりまはるすもあまのきとあまの比く

源の帰路の事也

いとこみとじり

あまの比く

かみあま

そとをた名の事也 けう二歳也

いづれもきぬわりの後

そより世をさやうの事也 けう二歳也

うせまはるすもあまのきとあまの比く

いづれもきぬわりの後

らうたりまはるすもあまのきとあまの比く

せろのきやうなぬのこはれは徳もしきしは
まじりやまつしんものありきまに朱産の
御目もしらうしりしは又そのまをせまを
七月廿余日のかた
海海東の市也

又かこひて

^秘まよゆこれなほあめさきまよひのよひとま
ほいの市に

^秘はのよはさし
よのつひまき

海の中にもほのよは東とかりあう海世を
常のまひつとかりつる也
よけなれ

かくなりまのまきまとさうなまきつるが例も帰京の
定りあるにつきて又け浦のらあまこくは
とて海の中也

入たさるまよ

かくこのまよもれもけ浦をり居之をまよまき也
これと海東へ行てその後のまよもあめ入たさるまよ
その比は東にぞく

海東ちりり火らんあまかくまよと

六月計りりあま^秘し
四月と懐妊す^秘し 秘日弄あ 海東の海をりてまよ
私

わやあひなるまよ

海東ちりりあま^秘し

^秘わやう物まよ^秘し
一生海物まよのまよまよと又いあやあひなるまよ
そし宿園なりとまよまよ

女はあひあひ

け比ぬまよしあまま候なりをまよくまよ又り海東
のちるまよ一候まよまよ

いともりなりや 卒の北

清かよひあけりまらん

都をそめし時、形はひ時ありて海きしもの色也

け浦文のふもきすしふたけれれを二は

くらおゆきま

御旅ののちつぎさひちり人

わりの入る海よられて

六月しらりて七月も如也

七月のあふや花を三六月に、次初は花をわらな

秘 子元のくまきとそり初秋ん

七月で初はあれたから元のくまきとそり初秋のふゆ

秘 昇秘ホノ系、七月のらりて八月も如とらん

七月廿全日さめて宣言の後よりさきりら如て

さて八月は序京とみり後よさるる、お目乃お

八月すめ夜ん

おろそや么つ

秘 源のち也

海くま初しをれつと

源ののち上へ名あわつ海に初し、おのちまきを

んこころへもりまき、おのちのちのち也

么しとらん

秘 推えらるや

秘 月比は、はらひ

秘 明名とのちをさのひもひ

け比あやあに

えい么とまらん、今の源のちを、月比は、秘

ふしをさきりけ比は、きり、么さし、あつ、

人よ、あつて、せん、あ、あ、あ、あ、あ、

秘 少納言とまらして

秘 良法やあ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、

秘 少納言は良法、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、

平

小山その物故やてめまきのつゝ人のよき良法もや

あまの

良法もやとぞしむ物をも

わがそり

あまの

源氏君の屋の御系の方をよ

といのやうはいよとあつた

あまの無の多ゆ人あつてにせしや今にたつて所

御系なりれよのこむの終るは海

としくまうけい

ゆゑの上の海

あまの

あまのひうてんとあつた

よやう

あまのひうてんあまのあつた

とつかをりなさいとあつた

いとくまを源の折をたつたのあつた

そのあまのひうてんあつた

あまのひうてんあつた

あまの上のあまのひうてんあつた

あまのひうてんあつた

あまのひうてんあつた

あまのひうてんあつた

あまのひうてんあつた

あまのひうてんあつた

あまのひうてんあつた

あまのひうてんあつた

あまのひうてんあつた

あまのひうてんあつた

あまのひうてんあつた

あまのひうてんあつた

あまのひうてんあつた

あまのひうてんあつた

あまのひうてんあつた

秘 かくわつあてだ

私しこころの事いふふかしくいふかの秘のたもあす
なぞりきりしりふん

わかれはうらなきて

秘 手 ぬえとの新しきしきいふ 秘曰

何さういふまゝ

そまそぬえとの秘

つわいゆいしきま

ぬえとのしの新を源のゆいしき

志のふたり共いしきいふ

秘 ずりきりしきいふ 秘曰

京よりきりしきいふ 秘曰

源の事の時りきりしきいふ 秘曰

入るえいしきいふ 秘曰

入道源の事いふふかされて堪無せし事いふ

をみその内いふ入る明え上なるいふ事

みかすしきいふ

ぬえとの源の事いふしきいふ

いふ事いふしきいふ

入るえの事いふ

秘 源の事いふしきいふ

私しこころの事いふふかされて堪無せし事いふ

源の事いふぬえとの事いふ

いふ事いふ

そりきりしきいふの事いふ源の事いふ

いふ事いふ

ぬえとの事いふ

秘 手 ぬえ

いふ事いふ

ぬえとの事いふしきいふ

秘 ぬえ

源の事いふしきいふ

ちやましき

おくゆしくゆりわりのこをうららとけたいぬ
く解しう 海の名やう

名のうまりゆくふたの

おののをちゆうきりゆりまわ

取うまわつまわつまるよそのかすみよとのかみ

あにかみよとめなきかみ

あはれにぬるあをさめつとつとせあゆむるやうけてまのん

ふたにぬるあをさめつとつとせあゆむるやうけてまのん

ふたにぬるあをさめつとつとせあゆむるやうけてまのん

ふたにぬるあをさめつとつとせあゆむるやうけてまのん

ふたにぬるあをさめつとつとせあゆむるやうけてまのん

ふたにぬるあをさめつとつとせあゆむるやうけてまのん

ふたにぬるあをさめつとつとせあゆむるやうけてまのん

ふたにぬるあをさめつとつとせあゆむるやうけてまのん

ふたにぬるあをさめつとつとせあゆむるやうけてまのん

あまのこをさめつとつとせあゆむるやうけてまのん

あまのこをさめつとつとせあゆむるやうけてまのん

あまのこをさめつとつとせあゆむるやうけてまのん

あまのこをさめつとつとせあゆむるやうけてまのん

あまのこをさめつとつとせあゆむるやうけてまのん

あまのこをさめつとつとせあゆむるやうけてまのん

あまのこをさめつとつとせあゆむるやうけてまのん

あまのこをさめつとつとせあゆむるやうけてまのん

あまのこをさめつとつとせあゆむるやうけてまのん

あまのこをさめつとつとせあゆむるやうけてまのん

あまのこをさめつとつとせあゆむるやうけてまのん

あまのこをさめつとつとせあゆむるやうけてまのん

あまのこをさめつとつとせあゆむるやうけてまのん

あまのこをさめつとつとせあゆむるやうけてまのん

返り上

年を待つとあやしおきてうき浪のかつらうや身をくらへ申し
奇の心は信をたもやなをいしてうき浪のくろくに
身をくるといふとくろくもくろくあり

井 身をすくんとくろくもくろくあり
井 身をすくんとくろくもくろくあり
井 身をすくんとくろくもくろくあり
井 身をすくんとくろくもくろくあり

うららひのうきもなりかな

井 雨ふとの身をくるとくろくもくろくあり
心なまのいあぬあや

志のいふとくろくもくろくあり
源のけしきをくるとくろくもくろくあり

志のいふとくろくもくろくあり
源のけしきをくるとくろくもくろくあり
源氏の女火より身を借とくろくもくろくあり
羊柳より浦をくるとくろくもくろくあり
人の心はさのくろくもくろくあり

秘 雨ふるとくろくもくろくあり
あなれとくろくもくろくあり

秘 雨ふるとくろくもくろくあり
雨ふるとくろくもくろくあり

秘 雨ふるとくろくもくろくあり
雨ふるとくろくもくろくあり

入道ふとのいふなりけ
雨ふるとくろくもくろくあり

雨ふるとくろくもくろくあり
雨ふるとくろくもくろくあり

源の雨世末
雨ふるとくろくもくろくあり

かたの川内をくいに
持衣 短裳 日記

^秘 短裳はくはらからひらめむ衣をかきけしや人のいといふ
まふとまふしきわられしや也 也 也

因志下の物もちりいろがころをまふとけしとよそ
の時よまわしつた物也 何んとのまらん

或抄の院をかしこぬまはるるまふとけぬれ
まわしつた也 何んとのまらん

川内をくいに
川内をくいのまらしむぬれつた也 侍持物成り

裳のうしろゆつぎをまふとけし
か^{返原}みまをふらけつたあまの日子をまふとけし中乃衣を
ぬまふとけつたあまのまら

^平ぬまふとけつたあまのまらぬまらぬつたあまの
私御衆ありしきしは終つて私しをへんぬれつた

つる私めまはるる志すはあまのまらぬまらぬ

かたの川内をくいに
^秘 入衣のまらぬまらぬまらぬ

け^秘 秘のまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

ま^秘 まのまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

私よりいかに幸ねうらを

人の世なるいかに幸ねうらを

人の世なるいかに幸ねうらを

明石上の市をよよりて言はれあか

あめやこい子をよよりて言はれあか

よつていかに幸ねうらを

私よりいかに幸ねうらを

これとけ國のよよりて言はれあか

すまじくいかに幸ねうらを

私よりいかに幸ねうらを

源の市をよよりて言はれあか

いかに幸ねうらを

源の市をよよりて言はれあか

とさういかに幸ねうらを

いかに幸ねうらを

源の市をよよりて言はれあか

源の市をよよりて言はれあか

源の市をよよりて言はれあか

源の市をよよりて言はれあか

源の市をよよりて言はれあか

源の市をよよりて言はれあか

源の市をよよりて言はれあか

源の市をよよりて言はれあか

源の市をよよりて言はれあか

源の市をよよりて言はれあか

源の市をよよりて言はれあか

源の市をよよりて言はれあか

源の市をよよりて言はれあか

あーどいぬのやう　めんとや

月のうきををりしとて

めんと、月の朧のそよめを根の恨せ
よりなきすゆれとらりすそとら

深の思に海菜よめんとをぐれんすかきゆきあは
されよりなきすゆれとらりあはとれをらすのほ
きとくにいら捨たるをうひさされまむひのそいで
毛しくらりくす人かまのうらあし
いけすゆに

せん心のあままにまのさかりい

母君にらくはあはして

母君の後悔也

いかにくしき人 ^か入た也

母君後悔して入道のをきいて似合おのりめい

あはるあや

^か入たの初し ^かあしきと懐妊のあや

あまやーやそ

母君の後悔一めんと、涙のそよめを入たのつはあはく
めけしあはりしきとらりまをうらいてまよく
くと割もりせとらりわたりと入た也

次の母君

入たの心のあまかあまをうらうれうらとあ

明んとり乳母と母君と

かろきくをみるあ

母君あはとらあなまを入たのみて割もれとよ

そとれもろくあし

かげられて

老るうらふまけりあはる也 ^{巻ノ字也}

ひつひと日いよ ^{書一日也終日のあ}

いそのと福くハ福をのと福くそと福くあをよ

日あるす汁すらとよあてあし入たのありあ

どいぬのゆきと 教珠也にらりいとおるるあを面白

つたはりせり

ふきしり

そし入るのしるりの忘却しるゆ也

くしきしあひあはして

淡悪也

私行し解怠

しるりの忘却しるゆ

かたよものあつたし

月来しりてまふたし

入道也

入るの事也物のまゝにのみ一自行しるゆ也

くしあつたのこゝろ

けり水のあつたつらさひしるゆ也

やんしりてあつたつらさひしるゆ也

入るの事也あつたつらさひしるゆ也

比し御法の銘も入る母もゆるとすのこゝろ

けりしりてあつたつらさひしるゆ也

しるゆ御法のあつたつらさひしるゆ也

そし入るのしるりの忘却

私行し解怠

仁徳所代にあつたつらさひしるゆ也

すみりしり

たつたつらさひしるゆ也

まぢあつたつらさひしるゆ也

まぢあつたつらさひしるゆ也

まぢあつたつらさひしるゆ也

まぢあつたつらさひしるゆ也

まぢあつたつらさひしるゆ也

まぢあつたつらさひしるゆ也

まぢあつたつらさひしるゆ也

まぢあつたつらさひしるゆ也

まぢあつたつらさひしるゆ也

まぢあつたつらさひしるゆ也

まぢあつたつらさひしるゆ也

同濟出京の時命よみて次(あ)の言(こと)をばねの末(すえ)に

いふにけしきよ

けしきの移(うつ)りたるのち(ち)は(は)い(い)ふ(ふ)

そ(そ)う(う)へ(へ)れ(れ)る(る)も(も)

い(い)ふ(ふ)の(の)う(う)ま(ま)き(き)い(い)ふ(ふ)

い(い)ふ(ふ)ら(ら)る(る)

又(また)か(か)の(の)あ(あ)ら(ら)る(る)

い(い)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)る(る)に(に)あ(あ)ら(ら)る(る)わ(わ)ら(ら)

い(い)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)る(る)に(に)あ(あ)ら(ら)る(る)わ(わ)ら(ら)

い(い)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)る(る)に(に)あ(あ)ら(ら)る(る)わ(わ)ら(ら)

い(い)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)る(る)に(に)あ(あ)ら(ら)る(る)わ(わ)ら(ら)

い(い)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)る(る)に(に)あ(あ)ら(ら)る(る)わ(わ)ら(ら)

い(い)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)る(る)に(に)あ(あ)ら(ら)る(る)わ(わ)ら(ら)

い(い)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)る(る)に(に)あ(あ)ら(ら)る(る)わ(わ)ら(ら)

い(い)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)る(る)に(に)あ(あ)ら(ら)る(る)わ(わ)ら(ら)

い(い)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)る(る)に(に)あ(あ)ら(ら)る(る)わ(わ)ら(ら)

い(い)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)る(る)に(に)あ(あ)ら(ら)る(る)わ(わ)ら(ら)

い(い)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)る(る)に(に)あ(あ)ら(ら)る(る)わ(わ)ら(ら)

い(い)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)る(る)に(に)あ(あ)ら(ら)る(る)わ(わ)ら(ら)

い(い)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)る(る)に(に)あ(あ)ら(ら)る(る)わ(わ)ら(ら)

い(い)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)る(る)に(に)あ(あ)ら(ら)る(る)わ(わ)ら(ら)

い(い)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)る(る)に(に)あ(あ)ら(ら)る(る)わ(わ)ら(ら)

い(い)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)る(る)に(に)あ(あ)ら(ら)る(る)わ(わ)ら(ら)

い(い)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)る(る)に(に)あ(あ)ら(ら)る(る)わ(わ)ら(ら)

い(い)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)る(る)に(に)あ(あ)ら(ら)る(る)わ(わ)ら(ら)

い(い)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)る(る)に(に)あ(あ)ら(ら)る(る)わ(わ)ら(ら)

い(い)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)る(る)に(に)あ(あ)ら(ら)る(る)わ(わ)ら(ら)

い(い)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)る(る)に(に)あ(あ)ら(ら)る(る)わ(わ)ら(ら)

寛初の位より中納言に叙せらるは也但三位へ上るは奏聞
して勅勅せしむれば所より上りて定むれば是によりて
源氏の君は最初出方の位より叙せしむれば位は
より多しと云はれ月日の位は家祿の大納言は則ち在
位にありて是より大納言より叙せしむれば
花多しなり中納言は流石の人より叙せしむれば
是より中納言より叙せしむれば是より中納言の
大納言より多し也

秘 中納言の位は大納言より多しなり
職負令云大納言二人は今の文の通りなり三人の叙
めり中納言の叙は字をくふべきなり寛平造誡云大
納言勿過指三人は遺誡の如し三人の叙は
指友の叙は中納言の叙より多しなり
指の字をくふべきなり中納言の叙は三人の叙より
中納言の叙は中納言の叙より多しなり
秘 中納言の叙は中納言の叙より多しなり
中納言の叙は中納言の叙より多しなり

遺誡云正權三人は花多しなり中納言は十人なり

大納言昔三人は花多しなり中納言は十人なり

正權若原時平一人は六月十九日聖廟并源光一人月日に
大納言に任じり大納言此時始に任じり

大納言正負令云四人相備は三位寛平為正二人其後指官加
增高倉御宇初為十人

天武天皇元年改御史大吏千時三人為大納言
淳和天皇天長五年三月八日夏野始任大納言

永觀元年八月始置四人
長和二年六月又置五人 若原頼通加任

又慶雲二年四月十七日勅曰依官負令大納言四人職常
既比大臣官任中納言三人以補大納言不足同日勅大納言
二人負為述更置中納言三人以補大納言不足也仍至中納
言者是令外也公卿正負者太政大臣左右大臣在大納言之

返上朱卷

字よりあらわりの多しおまじにけしきのみをのこす
太神宮造督の事な右抄にに川、孔と云れ、廿年
を急ぐに云々、孔はさしおあり、久しきゆえに、
そいふゆゑ、あらわりの多し、之の記、要也、志く、日印記、
侍、伴、儀、侍、伴、丹、の、言、天、の、山、根、を、め、て、く、ア、テ、一、面、
わ、い、給、す、り、あ、ま、い、そ、す、り、あ、ま、い、給、す、り、あ、ま、い、
へ、ま、い、や、給、す、り、の、是、く、あ、ま、い、そ、す、り、あ、ま、い、
殿、を、ま、て、向、ま、共、信、給、す、り、と、云、宮、根、と、云、お、れ、遠、の、御、
め、り、あ、ま、い、と、い、ふ、と、い、ふ、あ、ま、い、也、送、督、年、限、の、事、と、云、
い、ふ、文字、め、り、あ、ま、い、と、い、ふ、あ、ま、い、也、送、督、年、限、の、事、と、云、
右、人、尺、云、侍、伴、右、部、家、造、督、廿、年、回、す、り、と、云、
の、三、年、の、事、と、云、相、遠、と、云、他、又、久、し、き、ゆ、え、に、
堀、河、院、百、年、と、い、ふ、あ、ま、い、と、い、ふ、あ、ま、い、と、い、ふ、
あ、ま、い、と、い、ふ、あ、ま、い、と、い、ふ、あ、ま、い、と、い、ふ、
文武天皇朱鳥二年、廿年、一度、有、遷、宮、由、宣、
私、花、ノ、第、物、ト、一、何、ノ、第、不、用、ト、云、と、云、と、云、と、云、

いふゆめりしき

こと上のいふゆめりしき

院のいふゆめりしき

深のいふゆめりしき

因のいふゆめりしき

私に院のいふゆめりしき

志のいふゆめりしき

善のいふゆめりしき

此時十二歳也

未は受禪のいふゆめりしき

源のいふゆめりしき

わのいふゆめりしき

深のいふゆめりしき

世のいふゆめりしき

未は受禪のいふゆめりしき

われなるまゝ

花の女院より射の矢の花がらむやと拵てを
由らわかめわしに

及くのみをいひをまそ又はにわよのまをかく後
悟也きいぬんりぬをうりよまじらぬものうらめ
くは波よつけむおをうりの人の功にひて文留りま
ぬをうりの人のうらによつけまを

前後板 浪の浦をよさうりよまじらぬはうらめをうて申 絶筆
私をけあまをよん

いまうけて海やん
ふくこころ入る御あて

浪のらくいらぬ 文の村
むね 浪のらくいらぬ 文の村

いさうりてあいの浦はおきりのうらめ人をまらぬらぬ
めんの浦のおきりのうらめ人をまらぬらぬ むね

おきりの浦はおきりのうらめ人をまらぬらぬ むね

おきりの浦はおきりのうらめ人をまらぬらぬ むね

おきりの浦はおきりのうらめ人をまらぬらぬ むね

おきりの浦はおきりのうらめ人をまらぬらぬ むね

おきりの浦はおきりのうらめ人をまらぬらぬ むね

おきりの浦はおきりのうらめ人をまらぬらぬ むね

おきりの浦はおきりのうらめ人をまらぬらぬ むね

おきりの浦はおきりのうらめ人をまらぬらぬ むね

おきりの浦はおきりのうらめ人をまらぬらぬ むね

おきりの浦はおきりのうらめ人をまらぬらぬ むね

おきりの浦はおきりのうらめ人をまらぬらぬ むね

関古井 或抄より脱

かのちのしをぬり又せり せつり不^レ淡^レ未^レ元^レは^レ人 秘^レ元^レより次の言^レん

^秘大貳のしをぬり 此^レを^レ善^レ人^レ也

^再大貳のし 同^レ大^レ宰^レ帥^レを^レ大^レ貳^レの^レ意^レに^レ任^レる^レ事^レ也

一各一人大貳帥ヲ多スル^レ事^レ也 親^レ王^レノ^レ帥^レに^レ任^レる^レ時^レ大^レ貳

帥の職を^レ任^レる^レ事^レ也

私正帥^レに^レ親^レ王^レノ^レ任^レる^レ事^レ也 予^レ何^レに^レ任^レる^レ事^レ也

府務を^レ任^レる^レ事^レ也 又^レ大^レ臣^レ大^レ臣^レノ^レ任^レる^レ事^レ也

予何^レに^レ任^レる^レ事^レ也 予^レ何^レに^レ任^レる^レ事^レ也

予何^レに^レ任^レる^レ事^レ也 予^レ何^レに^レ任^レる^レ事^レ也

予何^レに^レ任^レる^レ事^レ也 予^レ何^レに^レ任^レる^レ事^レ也

予何^レに^レ任^レる^レ事^レ也 予^レ何^レに^レ任^レる^レ事^レ也

予何^レに^レ任^レる^レ事^レ也 予^レ何^レに^レ任^レる^レ事^レ也

予何^レに^レ任^レる^レ事^レ也 予^レ何^レに^レ任^レる^レ事^レ也

物^レの^レ言^レふ^レ事^レ也 源^レの^レ言^レふ^レ事^レ也

^秘人^レの^レ言^レふ^レ事^レ也 秘^レ人^レの^レ言^レふ^レ事^レ也

^秘予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也 秘^レ予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也

^再予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也 再^レ予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也

^秘予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也 秘^レ予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也

^再予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也 再^レ予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也

^秘予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也 秘^レ予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也

^再予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也 再^レ予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也

^秘予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也 秘^レ予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也

^再予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也 再^レ予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也

^秘予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也 秘^レ予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也

^再予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也 再^レ予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也

^秘予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也 秘^レ予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也

^再予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也 再^レ予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也

^秘予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也 秘^レ予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也

^再予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也 再^レ予^レの^レ言^レふ^レ事^レ也

あまの御本は日中紀ニヤハルことなれと義理まら
く二つ見や又又節君の文をくらし日中紀と
尺をくらんよらりて義理まら(きす)いと云れ
又河海抄ニ文の使のひりめきらくくさる
あまのといちらふよいくと云れゆりた列

私に源氏秘訣ニ有
元春天皇

虫のちやまの春なりしゆらと云のよくら中目過
といゆふ物やまひりめきらくくさる地廻をい
つらりてといふ事ゆをまらふこと也

^{みらる}源の浦は又やまを一人の能くするから神をさる
源の源はたりしや眼所書つて今を源は
なめをけきつに神と乳くらふこと也

^秘大我の女乃と見ゆはて返りつりし也
私まぐさ計をゆめなつてさるをいふは
よ又やまの柳を大我の女と入内はて返りつり
かつてかよやまをいふは神のいふこと也
^秘後撰

とあるはさるは源の源はて返りつりし
しあはかよやまをいふは源の源は
あり一版又節君の春をいふは源の源は
さるはさるは源の源はて返りつりし
そはかよやまをいふは源の源は
つらりてといふ事ゆをまらふこと也
かよやまをいふは源の源はて返りつりし

はるばるゆりしやいりてかろしをのほおむむみなり

あかきわいしじ

けみ高ハ源の平生么子けあ人なれと今ハワ

丁々くくくのみあや

私ゆ京ありてつたなりく悪いありきまこく終之し

いこふれハ源のをこ悪しあや

花ちる里まむむ

そつしあまい書つ連行ぬ

中くくあけまり

かをそくてふしハ只なけまのさきけん大帰系

わりてくハ山跡をならくハ恨しいてるなり

因系の子の地れら



